

話題

日本保健物理学会第 44 回研究発表会 (50 周年記念大会) への参加報告

細野 眞^{*1}

日本保健物理学会第 44 回研究発表会 (50 周年記念大会) が日本原子力研究開発機構の石田順一郎大会長のもと、2011 年 10 月 17 日 (月)、18 日 (火) の両日、JR 水戸駅に程近い水戸市宮町のホテルレイクビュー水戸で開催された。茨城県における本学会の研究発表会は、平成 7 年に水戸市の県民文化センターにおいて開催されて以来、16 年ぶり 6 回目とのことであった。もともとは 2011 年 6 月 15 日 (水) -17 日 (金) に開催予定されていたが、3 月の東日本大震災により延期を余儀なくされたものであり、開催に至るまでの大会長石田順一郎先生、副大会長山口恭弘先生、事務局長百瀬琢磨先生はじめ実行委員会の皆様のご苦勞は並大抵ではなかったことは想像に難くない。実行委員会の多くの方々、学会員の多くの方々が原子力発電所事故の収拾に全力を尽くしている時期に延期を決められ新たな日程での開催準備を進められたわけである。会場のホテルレイクビュー水戸そのものも東日本大震災の影響で営業を休止していた時期があったという。とはいうものの今回の大会は、本学会が日本保健物理協議会として 1961 年 9 月に設立を決定されてから 50 周年の節目を迎え、また 2011 年 8 月 12 日付で任意団体から一般社団法人に移行して法人格を持つに至った、その大切なタイミングで開催される記念すべき研究発表会である。多くの困難を乗り越えて開催されたのは幾重にも感慨深い。なお研究発表会前日の 10 月 16 日 (日) 午後には「学会 50 周年および一般社団法人発足記念会」が、今回の研究発表会会場ホテルレイクビュー水戸に近い HOTEL TERRACE the GARDEN MITO にて、言わばプレ・イベントとして開催された。

10 月 17 日 (月) は朝から青空の広がる穏やかな暖かい日和であった。受付開始時刻には既にホテルの 2F 会場前のホワイエから 1F ロビーが開会を待ちわびる参加者で賑わっていた。開会式の会場に足を踏み入ると飛天・鳳凰の 2 室のしきりが取り払われており、広大な空間に華やかな雰囲気が満ちあふれていた。会場の入口で、50 周年の記念誌と社団法人としての定款・規程の冊子が配布され、それを手に取ると今回の大会が本学会にとって特別な意義を持っていることを実感させられた。午前 10 時の定刻になって石田会長が花で彩られた演壇に立たれ開会の挨拶をされた (第 1 図)。堂々とした口調の中に、本学会の大事な記念大会を担う意志、参加者への歓迎のお気持ち、準備に携わったご関係の方々への謝意が伝わってきた。引き続いて小佐古敏荘会長が、学会の 50 年を振り返り、次の 50 年の継続的發展に決意を述べられた。今回の震災への対応でとりわけ重責を担われている会長の本学会に対する熱い思いがあった。さらに平成 22 年度学会賞の表彰式があり、各賞の受賞者に会長から表彰状が手渡されると惜しめない拍手が送られた。表彰式の最後に受賞者は会長と笑顔の記念撮影に臨んだ。

一連の式典が午前 11 時前に終了すると次は、ホテルスタッフが機敏に行動し、会場の椅子を移動し部屋の中にしきりを入れて飛天と鳳凰とを区分して新しいレイアウトを作ると、紫峰を加えた 3 室が、さきほどまでの華やかな雰囲気とはうって変わって引き締まった学術の発表・討論の場となった。午前 11 時からの放射線計測・線量評価、環境放射線 (能)、放射性廃棄物のセッションを皮切りに各部屋で 2 日間に渡る研究の発表・討論が始まった (第 2 図)。

正午から紫峰で大学等教員協議会が開催された。本研



第 1 図 石田順一郎大会長の開会の辞

Makoto Hosono: Report on the 44th Annual Meeting of Japan Health Physics Society.

^{*1} 近畿大学高度先端総合医療センター：大阪府大阪狭山市大野東 377-2 (〒589-8511)
Institute of Advanced Clinical Medicine, Kinki University; 377-2 Ohno-Higashi, Osaka-Sayama, Osaka 589-8511, Japan.
E-mail: hosono@med.kindai.ac.jp



第2図 口頭発表の会場



第3図 ポスター会場

究発表会の実行委員会が場所を確保してくださったものである。筆者は担当理事として協議会長の小田啓二先生とともに司会を務め、後進を育成するために協議会が情報交流の要となることを話し合った。いずれの大学でも保健物理関連の教育研究環境が厳しい中、若手をこの分野に勧誘し育てるために、研究機関の連携や施設設備の共同利用にも積極的に取り組んで行く必要があるし、大学間で教育、担当教員および設備に関する情報を共有することが欠かせない。なお今回の議論で、大学等教員協議会は学会員に広く門戸を開け、学位取得する希望を持つ社会人の方々など協議会活動に関心を持つ学会員ならばどなたでも、教員である方々と同様に協議会員とさせていただくこととした。さて、大学等教員協議会のあとは、理事会懇話会が小佐古会長の呼びかけで企画され、一般の学会員の方々が若い方もベテランの方も理事とともに本学会の歩みや今後の展望、震災への対応などにつき忌憚のない意見を交わし、有意義なひとときとなった。1時間ほどが瞬く間に過ぎ、まだまだ議論が尽くせない様子であったので、今後もできるだけこのような交流の機会を作って、学会員の連帯を図っていくべきであろうと感じた。

さて、会場ホテル1Fの南欧風レストラン、アルエットで筆者は昼食をいただいたが、レストランのスタッフが心地よい接客をし、食事もおいしく、明るい雰囲気で、そのうえ学会登録するともらえるレストランの金券が使え至れり尽くせりであった。ちなみに便利なことに会場ホテル1Fの土産菓子コーナーから水戸の銘菓を発送することができたので、勤務先で診療にあたってくれている同僚に届くよう注文を入れて、午後のスケジュールに臨んだ。

午後のポスターセッションも大盛況で、多数の参加者が熱心にポスターを閲覧して発表者と討論を行い、あまりの熱気に圧倒され少々酸欠状態であった(第3図)。

近畿大学原子力研究所から参加している大学仲間と一緒にポスターを見て回った。また良いポスター発表への投票も行われた。

また午後の一般演題では放射線影響-1および2のセッションを聞き、討論にも参加した。いずれも素晴らしい演題ばかりであったが、放射線の生体影響については未解明の領域が多いことを改めて実感した。放射線による発がんが従来の定説のようなDNA損傷起源だけではなく、別のメカニズム、つまり染色体の不安定化によるという説も信憑性が高く注目される。また低線量・低線量率・分割照射の放射線影響についても意欲的に検討されている。このような放射線影響学的、放射線生物学的な研究はエキサイティングで、非常に重要なアプローチであり、とりわけ低線量域の放射線影響が解明されれば、放射線防護のあり方を根本から変える潜在力があると思えた。今全国の大学で放射線生物学、放射線影響学、放射線基礎医学に関する研究講座が減ってしまっているが、今回の震災を契機に是非もう一度、これらの領域に人的資源も研究費も投入していただきたいものである。

夕方の懇親会は冒頭に参加者全員が並んで集合写真を撮影したあと(第4図)、大会長らによって鏡開きが行われた(第5図)。豊富に食事が振る舞われて、大勢の参加者が楽しいひとときを過ごした。優秀ポスターの表彰も執り行われ、一般の部で日本原子力研究開発機構の金澤信之氏、同じく小沼勇氏のお二人が最優秀賞、島根県保健環境科学研究所の生田美抄夫氏が優秀賞、学生の部で東京大学の藤通有希氏が最優秀賞、名古屋大学の河野竜司氏が優秀賞を受賞された(第6図)。

筆者は懇親会場でおいしいお酒をいただき上機嫌となって、本当は水戸の街に繰り出したいところであったが、今回は水戸の研究発表会に参加したそのあとすぐに、福島県川俣町(かわまたまち)に筆者を含めた近畿大学



第4図 参加者の集合写真

グループが赴いて、児童の方々の線量測定に関して打ち合わせることになっていたのです、おとなしく宿に帰ってゆっくり睡眠をとった。

大会2日目の18日(火)も穏やかな陽気に恵まれた。午前中の医療被ばくのセッションに参加したところ、多彩な内容のセッションであり、医療領域の線量評価手法につき意義の大きい研究報告が数多くなされていた。筆者は放射線科医師として日々診療に従事し、また厚生労働省の医療放射線に関する研究に関わっているの、大いに興味を持って拝聴し、質問もさせていただいたが、とりわけ日本原子力研究開発機構が中心となって取り組んでいる日本人のボクセルファントムを医療のX線CTに対する被ばく評価に用いる研究は、まさに医療放射線分野で求められているものである。現在X線CTは先進国において人工放射線による国民被ばくの最大の線源と考えられる。X線CTは精密な生体画像を提供して診療に役立っている一方で、多検出器列CTの進化による高速撮影なども相まって、撮影枚数や1件あたりの撮影枚数が右肩上がりである。CT線量を正確に把握することが、医療放射線利用の正当化と最適化の実現に貢献することは大である。このような状況で、日本人のボクセルファントムの利用の研究はもちろんであるが、それに限らず保健物理的手法の医療放射線への応用は今後多くの成果を生んで行くであろうことを確信した。現状では、わが国の医療放射線分野では人体の線量評価を厳密に行う学問的蓄積は少ない。一方、保健物理分野では線量評価の高度な理論・手法はあるが、それを現実に応用して役立つ局面が意外に少ないように思われる。これに対して、実効線量にして10-20mSvほど、かつ多様な被ばくが日常的に生じるのは医療分野ならではの特徴である。筆者としても保健物理学と医療放射線との橋渡し

に寄与したいと思っている。

18日の午後には福島原子力事故関連1-5のセッションがあり、事故影響下の放射線管理、大気や海洋への拡散シミュレーション、各地の環境放射線測定など、多くの貴重なデータが報告された。未曾有の事態に対処されて調査研究に取り組まれたご関係の方々のご尽力に敬意を表するとともに、今回発表されたデータを可及的速やかに学会誌に投稿していただき、人類の財産として世界の人々と共有したいと考える。できれば英文論文にまとめていただけるのが望ましいが、本学会誌では日本語論文でも要点は英文でも併記するわけなので、世界の人々に有用な資料となるであろう。時宜を逸しないことが大事であると思われる。

さて、2日間の研究発表会は盛会の内に幕を閉じ、発表151演題、参加者370名余りで、実り多い大会となった。大会長の石田先生をはじめ、運営に当たられた皆様のご尽力の賜である。スタッフの方々が非常に行き届いた学会運営をされていたと思う。また発表会場ではいずれの参加者にも真摯に保健物理学と向き合う姿勢が感じられたのは筆者個人の思い込みではないであろう。震災、学会創立50周年記念、社団法人への移行と稀有な事柄が重なった大会、放射線に関わる学問の広さ、深さ、そしてそれに取り組む日本保健物理学会の任務の重さを参加者は肝に銘じていたに違いない。筆者は因らざるもこの時機に理事を務めさせていただき、この時と場を学会の皆



第5図 懇親会の鏡開き



第6図 優秀ポスターの表彰

様方と共有できたことに心から感謝している。またもう一つ忘れてはならないのは、普段ならば出席を欠かすことのない熱心な学会員の方々に、今回の研究発表会には

参加されず、今なお第一線で震災後の事態の収拾に全力であたられている方々がおられるということであろう。本学会としても腰を据えて長期戦に臨むことになる。

最後にこの参加報告を書く機会を与えてくださった編集委員会の山口恭弘委員長、三枝純幹事にお礼を申し上げる。また素晴らしい写真はいずれも副大会長でもある山口恭弘委員長のご厚意により大会実行委員会から提供をいただいた。



細野 眞 (ほその まこと)

放射線核医学医。1985年に医学部卒業。専門は腫瘍核医学(PET診断, アイソトープ治療)。2001-2011年放射線審議会基本部会委員。2010年-日本アイソトープ協会理事。2011年-日本保健物理学会理事, 日本核医学会理事。